

## 原著論文

学士課程学生による研究の促進における大学図書館の役割：  
カリフォルニア大学バークレー校の事例調査

### The Role of Academic Libraries in Promoting Undergraduate Research: A Case Study of the University of California, Berkeley

新見 槿子  
*Makiko NIIMI*

#### *Résumé*

**Purpose:** Undergraduate research is attracting attention internationally in higher education. This study explores the role of academic libraries in promoting undergraduate research, based on a study of one academic library in the US.

**Methods:** The University of California, Berkeley was selected for the case study because the library was involved in the major project “Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research” for integrating research into undergraduate education. The study focused on 12 courses for which the library services are regarded as good practices. The library services provided for the 12 courses were examined and their characteristics were clarified, based mainly on documents published on the project’s website.

**Results:** 1) The project emphasized that library research assignments were incorporated into undergraduate courses to develop students’ research skills. Librarians were committed to designing assignments for most of the 12 courses. Faculty members and librarians collaborated to design library research assignments, and plan and practice assignment-related library sessions. 2) Undergraduate students were supported in various ways such as library sessions while they were doing assignments. 3) Graduate student instructors taking charge of small discussion groups and laboratory sessions were supported by librarians. 4) The library strengthened its educational role through its commitment to the project, and played a key role in reforming undergraduate education. The results of this study indicate that academic libraries have an important role to play in improving students’ research skills and information literacy when undergraduate research is promoted for reforming higher education.

---

新見槿子：慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻

Makiko NIIMI: Graduate School of Library and Information Science, Keio University

e-mail: niimi@z7.keio.jp

受付日：2013年3月24日 改訂稿受付日：2013年10月20日 受理日：2014年2月4日

- I. はじめに
  - A. 「学士課程学生による研究」に対する注目
  - B. 本研究の目的と構成
- II. 大学図書館と「学士課程学生による研究」の関係
  - A. 大学図書館による支援
  - B. 授業における取り組みの事例
- III. 事例調査
  - A. 調査対象と調査方法
  - B. グッドプラクティスから見る特徴
  - C. プロジェクトの特徴と意義
- IV. 「学士課程学生による研究」における大学図書館の役割
  - A. アメリカの大学図書館における動向
  - B. 大学図書館の役割

## I. はじめに

### A. 「学士課程学生による研究」に対する注目

「学士課程学生による研究 (undergraduate research)」<sup>1)</sup>という概念とそれを実現するための取り組みが、教育と研究の結びつきを強める方法として、高等教育において国際的に注目されている<sup>2),3)</sup>。

「学士課程学生による研究」という概念は、アメリカの自然科学分野の取り組みから生じたものである<sup>3)</sup>。その嚆矢は、1969年にマサチューセッツ工科大学 (Massachusetts Institute of Technology) が開始した、希望者を対象とする学士課程学生研究プログラム (Undergraduate Research Opportunities Program) とされている。同種の取り組みは、アメリカの他大学でも導入されるようになった。1978年には、アメリカの全国的な組織である学士課程学生研究協議会 (Council on Undergraduate Research)<sup>4)</sup>が発足した。この学士課程学生研究協議会は、当初リベラルアーツ・カレッジに所属する化学分野の研究者グループによって設立された組織であったが、現在では研究大学やコミュニティ・カレッジを含む様々なタイプの大学が参加し、全ての学問分野が対象となっている。同協議会には、約1万人の個人会員、650大学以上の機関会員が所属している<sup>5)</sup>。

アメリカでは、「学士課程学生による研究」に対して、財団による助成や提言も行われている。1980年代になると、全米科学財団 (National Science Foundation) が「学士課程学生による研究」を助成するプログラムを開始した<sup>2),6)</sup>。1998年には、カーネギー教育振興財団のボイヤー委員会 (Boyer Commission) が、『学士課程教育の再編』 (*Reinventing Undergraduate Education: A Blueprint for America's Research Universities*)<sup>7)</sup>を発表した。『学士課程教育の再編』は、研究大学において学士課程教育が軽視されがちであることを指摘し、研究大学の卓越した研究活動と環境を生かした学士課程教育改善の方法を提言した文書である。そのなかでも、「研究に基づく学習 (research-based learning)」を学士課程教育において標準にすることを提言している点が大きな特徴であった。「研究に基づく学習」を提案した『学士課程教育の再編』は、特に研究大学における「学士課程学生による研究」の促進に大きな影響を与えたと指摘されている<sup>6)</sup>。2000年代になると、「学士課程学生による研究」はさらなる注目を集めており、様々な研究が行われるようになっていく<sup>2),8),9)</sup>。

「学士課程学生による研究」の定義に関しては、研究者によって様々な見解があり、一様であるとは言えない<sup>2),3),9)</sup>。しかしながら、Huら<sup>9)</sup>が述べているように、学士課程学生研究協議会による

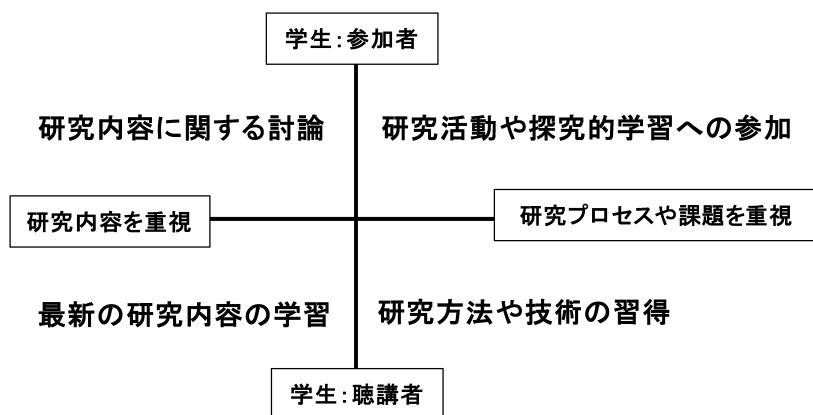
定義が、最も包括的な定義であるといえる。学士課程学生研究協議会では、「学士課程学生による研究」を、「学士課程学生によって実施され、専門分野に対して独自の知的もしくは創造的な貢献をする探究や調査」<sup>10)</sup>と定義しており、同協議会のウェブサイトには“研究を通した学習 (Learning through research)”<sup>4)</sup>という言葉が掲げられている。また、Kinkead<sup>11)</sup>も「学士課程学生による研究」を広く捉え、科学的探究、創造的活動、学識という言葉で定義を行っている。そして、その対象範囲は、自然科学・社会科学・人文科学・芸術活動など全ての分野に渡るとしている。

Healey と Jenkins<sup>12)</sup>は、「学士課程学生による研究」の形態を、重視するものが「研究内容」であるか「研究プロセスや課題」であるかの次元、学生が「聴講者」の立場であるか「参加者」であるかの次元から4つの類型に分類している(第1図)。この類型からは、「学士課程学生による研究」が、多様な活動を含むものであることが分かる。中井<sup>2)</sup>の解説を踏まえ、以下に各類型の説明を述べる。まず、1)「最新の研究内容の学習」は、「研究内容」が重視され、学生は「聴講者」である形態となる。これは、従来型の知識伝達モデルにおける授業を通して行われることが多く、それを通して学生がそれぞれの専門分野における最新の研究内容を学ぶ形をとる。2)「研究方法や技術の習得」は、「研究プロセスや課題」が重視され、学

生が「聴講者」である形態となる。研究方法や技術、研究への心構えなど、研究に関する技術的・倫理的な側面の知識を学ぶ形をとる。3)「研究内容に関する討論」は、「研究内容」が重視され、学生が「参加者」である形態となる。これは、研究内容に関する討論を通して学生が学ぶ形をとり、イギリスの大学におけるチュートリアルが念頭に置かれている。4)「研究活動や探究的学習への参加」は、「研究プロセスや課題」が重視され、学生が「参加者」である形態となる。学生が課題の探究を通して学ぶことであり、学生は研究者のように活動することが期待されている。なお、中井が指摘しているように、上記の4つの類型は概念上のモデルであり、実際の教育では、1つの授業の中に複数の形態が混在しうるものである<sup>2)</sup>。

以上より、「学士課程学生による研究」とは、学士課程学生が様々な形態によって取り組む研究や探究のための活動とそれを通した学習を示す概念であり、高等教育改革の手段としての性格を持つといえる。これは、日本語の「研究」という言葉から想起されるものよりも幅広い概念であると考えられる。なお、本研究では、「学士課程学生による研究」を、上記のような概念とそれを実現するための取り組みの総称と捉えている。

「学士課程学生による研究」の潮流を生み出したアメリカの大学では、「学士課程学生による研究」を実現するために多様な取り組みが行われて



第1図 「学士課程学生による研究」の形態の類型

注: Healey と Jenkins<sup>12)</sup>による類型。日本語訳は中井<sup>2)</sup>に基づくが、一部を著者が変更している。

いる。「学士課程学生による研究」を促進するための場が、初年次から卒業年次までの学生を対象として、授業内外において提供されている。具体的には、正規カリキュラムにおける通常の授業やセミナー、希望者に対してメンター役の教員が研究指導する学士課程学生研究プログラム、主に最終年次の希望者が論文執筆などを行うオーナーズ・プログラム、夏季休暇期間に希望者を対象に実施される特別プログラムなどがある<sup>2), 11), 13)</sup>。スタンフォード大学 (Stanford University) を対象とした事例研究<sup>13)</sup>では、研究に取り組んでいる学士課程学生に対する支援として、研究助成金の支給、研究成果発表イベントの開催、学士課程学生による研究論文を掲載する雑誌 (undergraduate research journal) の発行、優れた研究を行った学士課程学生に対する表彰が報告されている。

先述のように、「学士課程学生による研究」の嚆矢は、研究大学による取り組みであった。しかし、アメリカでは、研究大学だけでなく、リベラルアーツ・カレッジや学士課程学生が多い総合大学、さらにはコミュニティ・カレッジでも「学士課程学生による研究」が導入されている<sup>8), 9)</sup>。現在では、他国にも波及し<sup>12)</sup>、高等教育関係の国際学会のテーマとして「学士課程学生による研究」が取り上げられるようになってきている<sup>2)</sup>。日本でも、「学士課程学生による研究」の動向を紹介する研究者が現れている<sup>2), 13)</sup>。

大学図書館も「学士課程学生による研究」の動向に影響を受けている。特に、アメリカの大学図書館では、高等教育における「学士課程学生による研究」に対する注目の高まりを反映して、「学士課程学生による研究」に対して関心が集まるようになってきている。

## B. 本研究の目的と構成

本研究の目的は、「学士課程学生による研究」の潮流を生み出したアメリカの大学において、大学図書館が「学士課程学生による研究」に対してどのような役割を果たしているのか、あるいは果たそうとしているのかを明らかにすることである。国際的な潮流である「学士課程学生による研究」

における大学図書館の役割を検討することは、今後の大学図書館が果たすべき役割を明らかにすることにつながると考えられる。

本研究は以下の手順で進めた。第II章では、先行研究や事例報告文献などをもとに、大学図書館と「学士課程学生による研究」の関係についての論点整理を行った。次に、第III章において、カリフォルニア大学バークレー校 (University of California, Berkeley) で実施された、学士課程教育の授業に研究を導入するためのプログラムを対象とした事例調査を行った。事例調査を通して、学士課程教育の授業に研究を導入するための取り組みに大学図書館がどのように関わったのかを明らかにした。第IV章では、本研究の調査結果を踏まえた結論として、大学図書館が「学士課程学生による研究」においてどのような役割を果たしているのか、あるいは果たそうとしているのかを検討した。

## II. 大学図書館と「学士課程学生による研究」の関係

### A. 大学図書館による支援

大学図書館と「学士課程学生による研究」の関係を考えるにあたって、特に注目すべきは、第I章A節でも取り上げた『学士課程教育の再編』(1998年)<sup>7)</sup>である。『学士課程教育の再編』は、大学図書館に強い影響を与え、「学士課程学生による研究」への関心を高めた文書であった。『学士課程教育の再編』には、大学図書館に関する詳細な言及はない。しかし、“研究大学では、図書館、ラボ、コンピュータ、スタジオなどにおける探求を促進しなくてはならない”<sup>7)</sup>という一文があるとおり、大学図書館は「学士課程学生による研究」の構成要素の1つであると考えられる。

大学図書館は、『学士課程教育の再編』を重視していた。大学研究図書館協会 (Association of College and Research Libraries: ACRL) が2000年に発表した、「高等教育のための情報リテラシー能力基準」(Information Literacy Competency Standards for Higher Education)<sup>14)</sup>は、『学士課程教育の再編』を引用し、そこで提唱された調査

や問題解決、批判的思考を要する学習において、情報リテラシー能力が不可欠であるとしている。さらに、大学図書館における情報リテラシー教育や学士課程教育に対する支援に関する事例報告においても、その背景として『学士課程教育の再編』をあげている場合がある<sup>15)</sup>。

そして、大学図書館において、「学士課程学生による研究」に対する支援のために、様々な取り組みが行われるようになってきている。たとえば、1) 研究を学士課程教育の授業に導入するための取り組みへの関与<sup>15)</sup>、2) オナーズ・プログラム参加者に対する支援<sup>16)</sup>、3) 学士課程学生研究プログラムへの関与と参加者に対する支援<sup>17)</sup>、4) 学士課程学生による研究成果の発表イベントへの関与<sup>18)</sup>、5) 学士課程学生を対象とする図書館資源を活用した研究成果の表彰や研究助成の実施<sup>18)</sup>、6) 学士課程学生が執筆した研究論文を掲載する雑誌への関与<sup>19)</sup>などが行われている。

しかしながら、アメリカにおいても、「学士課程学生による研究」と大学図書館の関係をテーマとした文献が発表されるようになったのは近年のことであり、この分野に関する図書館情報学の研究はまだ数少ない。「学士課程学生による研究」は、高等教育研究において、学生エンゲージメント (student engagement)<sup>20)</sup>に強い影響を与える要素であるとされているにも関わらず、図書館情報学においてそれほど注目を集めてこなかったと指摘されている<sup>21)</sup>。「学士課程学生による研究」に対する検討は、図書館情報学においては未だに模索の段階であるといえる。

この分野における先駆的な文献は、Stamatoplos<sup>17)</sup>による論文である。この論文は、インディアナ大学・パデュー大学インディアナポリス校 (Indiana University-Purdue University, Indianapolis) における事例を取り上げつつ、「学士課程学生による研究」における大学図書館の役割を検討している。Stamatoplosは、通常の授業とは別に実施される、学士課程学生研究プログラムなどにおける独立した研究 (independent research) に対する大学図書館による支援を重視する立場をとっている。Daly<sup>16)</sup>は、デューク大学 (Duke University)

の図書館において「学士課程学生による研究」への支援を強化するために、オナーズ・プログラム参加者の研究行動、学士課程学生による研究成果の表彰イベントに参加した学生の情報探索行動に関する調査を行っている。

StamatoplosとDalyの文献はともに、通常の授業とは別のプログラムにおける「学士課程学生による研究」に対する、大学図書館による支援を対象としている。しかしながら、このようなプログラムは希望者のみが参加するものであり、大学図書館にとっても一部の学生のみが支援の対象となる。多くの学生に対して支援するためには、授業における取り組みは有効な手段であるといえ、それに対する注目も必要である。そのため、本研究では、授業における取り組みに着目することにした。

## B. 授業における取り組みの事例

授業における「学士課程学生による研究」に対する大学図書館の支援に関しては、複数の大学による事例が報告されている。たとえば、カリフォルニア大学バークレー校では、「Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research」<sup>22)</sup>(2003年～2007年)が実施された。プロジェクトの詳細は第III章において述べるが、簡単に説明すると、授業改善を目的として、学士課程教育の授業に研究を導入することを目指したプロジェクトであった。各科目を担当する教員に対して、図書館を含む様々な部署の職員による支援が行われた。その他、コーネル大学 (Cornell University) は、カリフォルニア大学バークレー校のプロジェクトを参考にして、「Cornell Undergraduate Information Competency Initiative」<sup>23)</sup>(2008年～2010年)を実施したことを公言している。ネバダ大学ラスベガス校 (University of Nevada, Las Vegas) においても、「Faculty Institute on Research-Based Learning for High Impact Classes」(2010年)が実施されている<sup>24)</sup>。

授業に研究を導入するための取り組みは、上記のような研究大学だけでなく、学士課程教育に特

化したリベラルアーツ・カレッジや教育重視の大学においても積極的に実施されている。その取り組みには模範的<sup>25)</sup>と評価されている事例もある。リベラルアーツ・カレッジである、グスタフ・アドルフ・カレッジ (Gustavus Adolphus College) の図書館は、政府の助成機関による資金をもとに、カリキュラム内における研究スキル養成のためのプログラム (2000年～2001年) を実施している。プログラムにおいて、図書館は教員に対する研修会を開催した。この研修会では、授業における研究スキル養成をテーマとした討議・模擬授業などが行われた<sup>25), 26)</sup>。

以上のような大学全体あるいは図書館全体のプロジェクトだけでなく、個々の科目や学科における取り組みに図書館が関与した事例の報告も行われている。例をあげると、ピッツバーグ大学 (University of Pittsburgh) における工学分野の初年次科目に研究を導入するための取り組み<sup>27)</sup>、ロックヘブン大学 (Lock Haven University) における生物学分野の入門科目のポスター発表課題への関与<sup>28)</sup>、ウエストジョージア大学 (University of West Georgia) における政治学分野の科目の課題への関与<sup>29)</sup>などについての報告がある。また、カナダの事例ではあるが、アルバータ大学オーガスタナ・キャンパス (University of Alberta, Augustana Campus) において、政治学分野の研究手法を学ぶ科目に、立ち上げ準備から図書館が関わっていた事例も報告されている<sup>30)</sup>。

上記で述べた、授業における「学士課程学生による研究」に対する大学図書館の取り組みのうち、本研究では、カリフォルニア大学バークレー校の「Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research」を対象に事例調査を行った。このプロジェクトは、関与した図書館員や教員によって様々な事例報告<sup>31)</sup>がなされたこと、また、他大学の同種の取り組みにも影響を与えたことが特筆すべき点である。これらの点から、プロジェクトは注目に値する取り組みであったと考えられるため、本研究で事例調査を行うことにした。

### III. 事例調査

#### A. 調査対象と調査方法

##### 1. 調査対象大学の概要

カリフォルニア大学バークレー校を対象とした事例調査を行った。同校は、14の学部・研究科が設置されている州立の大規模研究大学である。2012年時点で、35,899人の学生が在籍しており、その詳細は、学士課程学生25,774人、大学院生10,119人、その他6人となっている<sup>32)</sup>。カーネギー分類では、「研究大学 (大変高い研究活動性)」と分類されており、学士課程教育のタイプはリベラルアーツ分野の専攻が80%以上を占める大学とされている<sup>33)</sup>。図書館に関しては、The Library という図書館システムのもとに27の図書館が所属しており<sup>34)</sup>、2012年時点で、アカデミック・スタッフの図書館員はフルタイム換算92.88人となっている<sup>35)</sup>。

カリフォルニア大学バークレー校は、研究大学において教育が重視されるようになっている傾向の代表例とされている。2002年に策定された同校の戦略学術プランには、学生に対する教育成果を上げるための学士課程教育の充実、質の高い教育を保証するための授業方法の変革といった学士課程教育に関わる項目が含まれており、さらに学士課程教育の充実のために課題探究型の学習を取り入れることも提言されていた<sup>36)</sup>。同校の学士課程教育改善に関わる取り組みは、日本においても注目されている。日本の教育学分野では、同校におけるティーチング・アシスタント (大学院生インストラクター<sup>37)</sup>)<sup>38), 39)</sup>、ファカルティ・ディベロップメント<sup>39)</sup>、共通教育<sup>40)</sup>を分析した研究が行われている。

##### 2. プロジェクトの概要

事例調査の対象としたプロジェクトは、「Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research」 (以下 Mellon Initiative)<sup>22)</sup>である。同プロジェクトは、メロン財団 (Andrew W. Mellon Foundation) からの助成によって実施されたものである。2002年にメロン財団からの助成が開

始された後、2003年から2007年までの期間、授業改善の取り組みが実施された。また、同プロジェクトの延長として、2008年から2009年まで「Mellon-Undergraduate Student Learning Initiative Curricular Innovation Grants」が実施されている<sup>41)</sup>。Mellon Initiativeの概要は、第1表のとおりである。

Mellon Initiativeは、学士課程教育担当の副学長室と図書館が中心的な役割を果たして創設されたプロジェクトである。プロジェクトのディレクターは副館長、マネージャーも図書館員であった<sup>22), 42)</sup>。Mellon Initiativeは、当時副館長であったPatricia Iannuzzi氏<sup>43)</sup>が提案したものであった。Iannuzzi氏は、プロジェクトのディレクターとして、メロン財団に提出した助成金申請書の作成、図書館員を含むプロジェクトに参加した様々な部署の職員の取りまとめにおいて中心的な役割を果たした。2005年に、Iannuzzi氏の後任として、現副館長のElizabeth Dupuis氏がディレクターに就任した<sup>44)</sup>。

Mellon Initiativeは、第I章A節で取り上げた『学士課程教育の再編』<sup>7)</sup>において提言された、

「研究に基づく学習」を学士課程教育に導入するためのプロジェクトであった。プロジェクトを通して、「授業と課題の再構築」、「大人数科目やコア科目の授業の再活性化」、「学生の情報活用能力と批判的思考能力の養成」が目指された。大人数科目や低学年向け科目、コア科目などを担当する教員のなかから、プロジェクトに参加する教員が選抜された。選抜された教員は、各部署の職員からなる実施チーム(Implementation Team)、評価や教授法の専門家とともに、学士課程教育の授業を改善するための取り組みを行った。なお、実施チームの職員は、図書館、大学院生インストラクター教育資源センター(Graduate Student Instructor Teaching & Resource Center)、教育技術サービス(Educational Technology Services)、学生学習センター(Student Learning Center)の職員であった。実施チームの図書館員は、学内の様々な図書館に所属しているリエゾン担当者であった。この他、学士課程教育担当の部署、ファカルティ・ディベロップメント担当の部署もプロジェクトに参加していた<sup>22), 42), 45)</sup>。

選抜された教員は、新学期前に開催される6日間

第1表 Mellon Initiativeの概要

名称	Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research (Mellon Initiative)
実施大学	カリフォルニア大学バークレー校
資金援助	メロン財団
実施期間	2002年～2007年 <sup>1)</sup>
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業と課題の再構築</li> <li>・大人数科目やコア科目の授業の再活性化</li> <li>・学生の情報活用能力と批判的思考能力の養成</li> </ul>
体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学士課程教育担当の副学長室と図書館が中心となって創設</li> <li>・様々な部署が参加</li> <li>・ディレクターは副館長。マネージャーも図書館員</li> </ul>
実施方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な学科に所属する教員を選抜</li> <li>・教員は、新学期前に開催される6日間の夏季研修会に出席</li> <li>・教員は、実施チームの職員、評価や教授法の専門家と協働</li> <li>・実施チームは、図書館、大学院生インストラクター教育資源センター、教育技術サービス、学生学習センターの職員</li> </ul>
対象科目の概要	大人数科目、低学年向け科目、コア科目など
対象科目数	44科目(29科目が低学年向け)
対象科目の履修者数	12,576人

注: Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research<sup>22)</sup>を参照して作成。

<sup>1)</sup> 同プログラムの延長として、「Mellon-Undergraduate Student Learning Initiative Curricular Innovation Grants」(2008年～2009年)が実施されている。

第2表 履修人数別の科目数

履修人数	科目数
1000人以上	1
500人～750人	5
200人～450人	9
100人～175人	13
50人～80人	6
20人～35人	5
不明	5

注：Course List<sup>48)</sup>を参照して作成。

の夏季研修会 (Summer Institutes) に出席し、そこで学士課程教育に研究を取り入れるための効果的なシラバスや課題の開発に関して議論を行った。夏季研修会の後に、教員は実施チームの職員数人とともにシラバスや課題の洗練化、技術や評価を授業のなかに取り入れるための取り組みを行った。なお、教員には助成金が支払われた<sup>22), 46)</sup>。

2003年から2007年の期間に、44科目が授業改善の取り組みの対象となった(付録)。そのうち、低学年向けの科目は29科目であった<sup>47)</sup>。また、大規模あるいは中規模のクラスにおける科目が多かった(第2表)<sup>48)</sup>。上記期間において、12,576人の学生がMellon Initiativeで対象となった科目を履修した<sup>47)</sup>。

### 3. 調査方法

文献調査とインタビュー調査による事例調査を行った。本研究における主な調査結果は、文献調査に基づくものである。文献調査の際には、Mellon Initiativeのウェブサイトにおいて公表されている文書を主に利用し、補足的にカリフォルニア大学バークレー校の関係者による事例報告文献も利用した。インタビュー調査は、文献調査において明らかにできなかった点を確認するために実施した。2013年8月に、Mellon Initiativeのディレクターであった、カリフォルニア大学バークレー校図書館の副館長 Elizabeth Dupuis氏に対して電子メールでのインタビュー<sup>44)</sup>を行った。

事例調査を実施するにあたって、Mellon Initiativeの科目のうち、図書館による取り組みがグッドプラクティスであると紹介されている

12科目(以下グッドプラクティスの科目)を分析の対象とした。Mellon Initiativeのウェブサイトの「Good Practices」のページには、グッドプラクティスの科目を担当した各図書館員(1人ないし2人)による報告文書<sup>49)</sup>が掲載されている。グッドプラクティスの報告文書の作成は、図書館員同士の情報共有の手段として実施されたものであった。報告文書は、特に効果的・革新的・示唆的であると考えられる図書館の取り組みを記したものである<sup>44)</sup>。

本章B節では、この報告文書を主に利用して、図書館によって実施されたグッドプラクティスの取り組みを分析し、さらにその取り組みの特徴を見た。この結果をもとに、本章C節では、Mellon Initiativeにおいて、図書館が「学士課程学生による研究」に対してどのような役割を果たしたのかを検討した。

Mellon Initiativeの科目における図書館の取り組みに関しては、カリフォルニア大学バークレー校の関係者による事例報告の文献<sup>50)</sup>が存在する。しかし、複数の科目における取り組みを俯瞰し、その特徴を見ている研究はない。そのため、本研究において検討する意義があるといえる。

### B. グッドプラクティスから見る特徴

グッドプラクティスの報告文書(12科目)<sup>49)</sup>を利用した分析を行い、その特徴を見た。報告文書の記述をもとに、まず図書館による取り組みを類型化し、次に、それらの取り組みの実施体制と取り組みがもたらした結果についてまとめた。分析結果は、第3表から第6表に示している。なお、表中の(1)から(8)は2003年～2004年度、(9)から(12)は2004年～2005年度における科目である。

第3表から第6表の構成と本節第1項以下の内容は、次のとおりである。

第3表では、各科目の「科目番号・科目名」「授業の概要」「授業実施場所または授業構成」を記している。第4表では、報告文書の記述をもとにして、「図書館による取り組み」「取り組みの特徴」を記している。「図書館による取り組み」は、報告文書の見出しなどを参考にして、各科目にお



第3表 分析対象とした科目の一覧

	科目番号・科目名	授業の概要	授業実施場所 授業構成
(1)	フランス語 102 (フランス語のリーディング, ライティングのスキル)	フランス語でのライティングとリーディングに取り 組む科目である。フランス文学に関する世界的視野, フランス語で文学議論を行う能力を習得すること を目指す。	—
(2)	造景学 154 (視覚記録から学ぶ)	建築物・景観に関する一次史料を利用して, 研究 プロセスを学ぶキャプション科目である。授業で は, 環境デザイン・アーカイブで所蔵している様 々な史料を活用する。	教室 アーカイブ 現地での実地調査
(3)	民族学 21AC (合衆国における人種・民族 グループの比較調査)	アメリカ史における人種・民族の役割を探究する 科目である。リサーチ・ペーパー, 書誌作成の課 題を課す。講義の他に, 大学院生インストラク ターが指導するディスカッションがある。	講義 ディスカッション・ グループ
(4)	公衆衛生 150A (疫学と人間の疾病に関する 入門)	疫学の基本を学ぶ入門科目である。疫学に関 する研究成果の入手と読解の手法を学ぶこと を通して, 批判的思考能力の向上, 研究手法 の知識習得を目指す。	教室
(5)	工学 190E (技術コミュニケーション)	工学分野におけるライティングやプレゼン テーション, ディスカッションの能力向上 を目指す科目である。英語が母語ではない 学生を対象とする。	コンピュータ・ラ ボ 教室
(6)	工学 E190R (技術コミュニケーション)	研究プロジェクトに取り組むことを通して, 技術コミュニケーションを向上させること を目指す科目である。授業を通して, 複数 のレポートとプレゼンテーションに取 り組む。	教室
(7)	生物学 1A (一般生物学)	生物の入門科目である。講義の他に, ラ ボにおける実験とディスカッションの時 間がある。授業において, 科学文献を 検索し, その文献を評価するという課 題を課す。	講義 ラボ (実験) ディスカッション
(8)	人類学 3	人類学に関する入門科目である。授業は, 受講者全員が参加するディスカッ ション・フォーラム, 大学院生イン ストラクターが指導する少人数グル ープからなる。	ディスカッション・ フォーラム 少人数グループ
(9)	歴史学 8B (現代ラテンアメリカ)	現代ラテンアメリカ史に関する入門 科目である。7か国を対象とした 事例研究を行う。一次史料, 個人 によるオーラル史料, 民族誌, 歴 史学の研究文献, 映像・音楽など を扱う。	講義 ディスカッション・ グループ
(10)	カレッジ・ライティング R4B	ライティング能力を向上させるための 科目である。様々な専攻の学生が 受講するため, 学際的テーマ (サブカルチャー) を取り扱う。 図書館を利用した調査が授業の なかに組み込まれている。	—
(11)	平和構築・紛争予防研究 125AC	アメリカにおいて国家アイデンティ ティ等が形成される際に, 戦争が 果たす役割を探究する科目である。 授業では, 2つのリサーチ・ペ ーパーを課す。	—
(12)	化学 1A (一般化学)	化学の入門科目である。講義の 他に, ラボにおける実験とディス カッションがある。大学院生イン ストラクターが指導するラボでの 実験の準備として, 文献の検索 と分析・評価の課題が課される。	講義 ラボ (実験) ディスカッション

注: Good Practices<sup>49)</sup> および, Course List<sup>48)</sup> を参照して作成。なお, (1) から (8) は 2003 年～2004 年度, (9) から (12) は 2004 年～2005 年度における科目である。

第4表 グッドプラクティスとして報告された図書館による取り組み

	科目番号・科目名	図書館による取り組み	取り組みの特徴		
			課題	学生	院生
(1)	フランス語 102 (フランス語のリーディング, ライティングのスキル)	授業内における図書館ガイダンスのための事前課題 (library research assignment)	○	○	
(2)	造景学 154 (視覚記録から学ぶ)	研究プロセスと研究資源に関するオンラインガイドの作成	○	○	
(3)	民族学 21AC (合衆国における人種・民族グループの比較調査)	レファレンス・ルームでの図書館ガイダンスを通じた能動的学習	○	○	
(4)	公衆衛生 150A (疫学と人間の疾病に関する入門)	大人数科目のための「library research assignment」	○	○	
(5)	工学 190E (技術コミュニケーション)	トピック明確化の時期に図書館ガイダンスを実施	○	○	
(6)	工学 E190R (技術コミュニケーション)	教員との協働を通じた図書館ガイダンスの実施	○	○	
(7)	生物学 1A (一般生物学)	大人数科目のための雑誌論文に関する課題 (library research assignment) の作成	○	○	
(8)	人類学 3	大人数科目における大学院生インストラクターへの支援		○	○
(9)	歴史学 8B (現代ラテンアメリカ)	歴史学のリサーチ・ペーパーへと高めるための段階的な指導と課題 (library research assignment)	○	○	
(10)	カレッジ・ライティング R4B	「library research assignment」に関する活動の協働の実施	○		
(11)	平和構築・紛争予防研究 125AC	大人数科目における個別的な援助	○	○	
(12)	化学 1A (一般化学)	課題の構成要素として、情報資源評価ワークシート (library research assignment) を利用	○		○

注：Good Practices<sup>49)</sup>を参照して作成。なお、「取り組みの特徴」における「課題」は「1. 授業における課題への関与」, 「学生」は「2. 様々な形態での学生に対する支援」, 「院生」は「3. 大学院生インストラクターに対する支援」をそれぞれ指す。

る取り組みの内容をまとめている。「取り組みの特徴」は、各科目における取り組みの概要（第5表に記述）をもとに、取り組みの特徴を3つに類型化したものである（「1. 授業における課題への関与」, 「2. 様々な形態での学生に対する支援」, 「3. 大学院生インストラクターに対する支援」）。本節第1項から第3項では、各類型の特徴と具体例を述べる。第5表の「図書館による取り組みの概要」は、取り組みの内容に関する報告文書の記述を要約し、各科目における取り組みの概要を記したものである。上述のとおり、本節第1項から第3項において、各類型別に特徴と具体例を述べている。また、第4項では、取り組みの実施体制についての全体的な特徴を見る。第6表の「図書

館による取り組みの結果」は、報告文書で述べられている取り組みの結果に関する記述を要約したものである。本節第5項で、その内容についてまとめる。

#### 1. 授業における課題への関与

ほとんどのグッドプラクティスの科目において、課題に対する何等かの取り組みが報告されている。図書館員は、授業で課される課題の設計への関与、課題に関連する図書館ガイダンスの実施などを通して、課題のコンサルタントとしての役割を果たした<sup>51)</sup>。

特に、最終レポートなどの準備として、図書館資源を利用させる課題である「library research

第5表 図書館による取り組みの概要

	科目番号・科目名	図書館による取り組みの概要
(1)	フランス語 102 (フランス語のリーディング、ライティングのスキル)	図書館ガイダンスの事前課題である「library research assignment」において、課題エッセイと書誌が指定された。課題では、エッセイで使用されている言葉から、あるテーマを調べる際に検索語になりうる言葉を特定すること、百科事典・図書・雑誌といった様々なタイプの資料を判別すること、一次資料と二次資料の区別をすることが求められた。
(2)	造景学 154 (視覚記録から学ぶ)	研究プロジェクト遂行を支援するために、オンラインガイド「建築と場所に関する情報の見つけ方」が作成された。ガイドでは、研究プロジェクトの進め方、問いの立て方、研究資源などが説明されていた。
(3)	民族学 21AC (合衆国における人種・民族グループの比較調査)	最初に、クラス全体に対する1時間のガイダンスと授業用オンラインガイドの提供が行われた。次に、大学院生インストラクターが指導するディスカッション・グループ(10組)ごとに、図書館のレファレンス・ルームにおいて、それぞれの学生の研究課題に合わせた図書館ガイダンスが行われた。成績評価のうち、50%が一次資料・二次資料を活用したリサーチ・ペーパー、25%が図書館ガイダンスの後に提出する書誌(library research assignment)に基づいた。
(4)	公衆衛生 150A (疫学と人間の疾病に関する入門)	教員は、疾病に関するファクトシート作成の課題において、必要な情報が載っているレビュー論文を特定するために、PubMedを利用することを要求した。疾病ファクトシート作成の準備として、「library research assignment」が課された。この課題では、検索過程に関する質問(「どのように検索を行ったか」、「件名標目は何であったか」)への回答、PubMedで検索した文献の書誌事項を図書館員に提出することが求められた。課題が課された前後の授業で、図書館員が課題に関する解説を行った。
(5)	工学 190E (技術コミュニケーション)	1回目の図書館ガイダンスの前に、教員は文献レビュー作成のための大まかな関心分野の決定を学生に求めた。1回目の図書館ガイダンスでは、基本的な工学分野の索引と検索テクニックについての説明が行われた。次に、2回目の図書館ガイダンスの前に、学生は前回のガイダンスをもとにトピックを狭めることが求められた。2回目のガイダンスでは、工学分野の索引を利用した、より複雑な検索に関する説明が行われた。
(6)	工学 E190R (技術コミュニケーション)	授業開始前の教員との打ち合わせにおいて、図書館ガイダンスを授業のどこで行うのがふさわしいかが話し合われ、3回のガイダンスを行うことが決められた。ガイダンスの前後にも打ち合わせが行われた。ガイダンスは、学生が取り組む課題の難易度の変化に合わせて、一般的な科学文献データベースから専門的な工学分野のデータベース、応用的な検索テクニックへと進む形がとられた。
(7)	生物学 1A (一般生物学)	学生は、授業時間外で実施される図書館ガイダンスに参加することが求められた(単位認定に含まれる)。ガイダンスでは、データベースや検索に関する説明が行われた。ガイダンス後に、10本の論文を含んだ書誌を作成し、そこからレポートの議論で使う3本の論文を選択する「library research assignment」が課された。
(8)	人類学 3	授業での少人数グループを指導する大学院生インストラクターに対して、クラス全体への図書館ガイダンスの前に、ガイダンスの予行が行われた。その目的は、大学院生が事前に図書館に関する知識を得て、指導がスムーズに行えるようにするためであった。
(9)	歴史学 8B (現代ラテンアメリカ)	ディスカッション・グループごとに図書館ガイダンスを実施し、一次資料と二次資料の説明、パスファインダーや歴史学の索引を利用した検索に関する説明が行われた。ガイダンス後に、各グループは、あるトピックに関連する3~5件の一次資料の検索と、少なくとも2件の二次資料の利用を求められた。その後、それらの資料を要約した課題書誌レポートの作成、リサーチ・ペーパーにおけるリサーチ・クエッションの考案を求める、「library research assignment」が課された。

第5表 続き

	科目番号・科目名	図書館による取り組みの概要
(10)	カレッジ・ライティング R4B	「library research assignment」のワークシートが作成され、課題として学生に課された。そのワークシートでは、図書館目録を利用した検索結果に関する質問への回答、MLA スタイルでの引用文献の記入が求められた。課題を通して、学生は図書館目録やパスファインダーの利用を学んだ。課題の目的の設定、タイミング、実施、フィードバックにおいて、教員と図書館員による協働が行われた。
(11)	平和構築・紛争予防研究 125AC	クラス全体に対する2回の図書館ガイダンスにおいて、①リサーチ・ペーパーのテーマに関連する、オーラル・ヒストリーの説明、個人の物語や日記といった資料の検索方法の説明、②一般的な目録利用や件名標目の説明が行われた。さらに、メールやコース・マネージメント・システムでの情報提供も行われていた。その後、リサーチ・ペーパーに取り組む学生に対する個別指導が開始された。繰り返しされる質問に関しては、クラス全体に対してメールでの情報提供が行われた。
(12)	化学 1A (一般化学)	大学院生インストラクターが指導するラボで取り組む課題として、ワークシートが作成された。ワークシートの目的の1つは、学生と大学院生の双方が課題を理解できるようにすることであった。ワークシートでは、学生自身が立てた仮説に関連する情報資源を3件選び、ACSスタイルで記した上で、簡単な分析・評価と要約を記入することが求められた。

注：Good Practices<sup>49)</sup>を参照して作成。

assignment<sup>52)</sup>が課されることが多い点に特徴があった。グッドプラクティスの科目における「library research assignment」の内容は、資料の検索、検索した資料の評価、正しい形式での引用、資料をもとにしたリサーチ・クエッション考案などであった<sup>53)</sup>。そして、その課題が課される前後に、図書館員が授業において図書館ガイダンスを実施していた。

たとえば、フランス語能力の向上と文学議論を行う能力の習得を目指す科目である「フランス語 102 (フランス語のリーディング、ライティングのスキル)」(第3表: (1)) では、授業において図書館ガイダンスを実施する前に、学生に対して、「library research assignment」が課された。課題では、指定されたエッセイとそれに含まれる書誌を読み、エッセイのなかで使用されている言葉から、あるテーマを調べる際に検索語になりうる言葉を特定すること、百科事典・図書・雑誌といった様々なタイプの資料を判別すること、一次資料と二次資料の区別をすることが求められた(第4表・第5表: (1))。

疫学分野の知識と研究手法の習得、批判的思考能力の向上を目指す科目である「公衆衛生 150A

(疫学と人間の疾病に関する入門)」(第3表: (4)) では、疾病ファクトシート作成の課題に関連する「library research assignment」が課された。疾病ファクトシート作成の課題では、PubMedを利用することが求められた。この課題に取り組むための準備として、「library research assignment」が課された。「library research assignment」では、「どのように検索を行ったか」、「件名標目は何であったか」といった、学生自身が行った検索過程に関する質問に回答して、PubMedで検索した文献の書誌事項を図書館員に提出することが求められた。この課題を課す際に、図書館員が課題の説明を授業中に実施し、さらに課題提出後のフォローアップも図書館員が授業中に実施した(第4表・第5表: (4))。

生物学の入門科目である「生物学 1A (一般生物学)」(第3表: (7)) では、学生は授業時間外に実施される図書館ガイダンス(単位認定に含まれる)に参加することが求められ、その図書館ガイダンスの後に「library research assignment」が課された。図書館ガイダンスではデータベースや検索に関する説明が行われ、その後、10本の論文を含んだ書誌を作成し、そこからレポートの

議論で使う3本の論文を選択する課題が課された(第4表・第5表:(7))。

現代ラテンアメリカ史の入門科目である「歴史学8B(現代ラテンアメリカ)」(第3表:(9))では、リサーチ・ペーパーの準備として、「library research assignment」が課された。授業において様々な史料や文献を取り扱うこの科目では、図書館ガイダンスが実施された後に、学生はトピックに関連する3件から5件の一次資料の文献を検索すること、2件以上の二次資料を利用することが求められた。その後、それらの資料を要約した解題書誌レポートの作成、資料をもとにしてリサーチ・クエッションを考える課題が課された(第4表・第5表:(9))。

「library research assignment」は、成績評価にも関係していた。たとえば、「民族学21AC(合衆国における人種・民族グループの比較調査)」(第3表:(3))では、成績評価のうち、25%が図書館ガイダンス後に提出する書誌に対する評価であった(第4表・第5表:(3))。

先述したように、図書館ガイダンスは、課題と密接に関わるものであり、課題におけるトピック選定や資料の検索に関連する形で行われた。実施時期も課題の進捗を考慮し、ふさわしい時期が選ばれた。たとえば、研究課題への取り組みを通して研究スキルを身に付けることを目的とする「工学190E(技術コミュニケーション)」(第3表:(5))では、文献レビュー作成の課題におけるトピック明確化の時期に、授業において図書館ガイダンスが実施された。まず、学生が大まかな関心分野を決定した後に、1回目の図書館ガイダンスが実施され、基本的な工学分野のデータベースと検索テクニックの説明が行われた。学生は、図書館ガイダンスをもとにトピックを狭めた。その後、2回目の図書館ガイダンスにおいて、より複雑な検索テクニックの説明が行われた(第4表・第5表:(5))。

## 2. 様々な形態での学生に対する支援

学生に対する支援は様々な形態で実施され、1つの科目において複数の形態での支援が実施さ

れる場合もあった。

最も多く報告されたのは、図書館ガイダンスであった。図書館ガイダンスは、授業時間内での実施、もしくは授業時間外だが単位認定されるものであった。図書館ガイダンスでは、一次資料と二次資料の違い、各種データベースの利用方法、効果的な検索方法などの説明が行われた。図書館ガイダンスは、学生が取り組んでいる課題の進捗状況に合わせて複数回実施される場合もあった。

図書館ガイダンス以外にも、授業向けオンラインガイドの作成、対面での課題へのアドバイス、メールやコース・マネージメント・システムを利用した情報提供を行った科目もあった。

地域の建築物・景観に関する一次史料を利用しながら研究プロセスを学ぶ科目である「造景学154(視覚記録から学ぶ)」(第3表:(2))では、図書館員が作成した授業向けオンラインガイドが提供された。このガイドでは、研究プロジェクトの進め方や問いの立て方、研究資源などが説明されていた(第4表・第5表:(2))。

リサーチ・ペーパーと書誌作成の課題が課された「民族学21AC(合衆国における人種・民族グループの比較調査)」(第3表:(3))では、クラス全体、授業内の少人数ディスカッション・グループのそれぞれに対する支援が行われた。最初に、クラス全体に対して、図書館ガイダンスの実施、オンラインガイドの提供が行われた。次に、少人数ディスカッション・グループに対して、図書館内においてそれぞれの学生の研究課題に合わせた図書館ガイダンスが実施された(第4表・第5表:(3))。

授業において2つのリサーチ・ペーパーが課された「平和構築・紛争予防研究125AC」(第3表:(11))では、リサーチ・ペーパーに取り組む学生のために、複数の支援が行われた。その方法には、①クラス全体に対する図書館ガイダンス、②メールやコース・マネージメント・システムでの情報提供、③対面での個別のアドバイスがあり、また、④繰り返しされる質問に関しては、クラス全体にメールで情報提供することも行われた(第4表・第5表:(11))。

### 3. 大学院生インストラクターに対する支援

大人数科目においては、教員による講義の他に大学院生が指導する少人数グループのディスカッションや実験が含まれることが多い。そのため、大学院生インストラクターに対する支援も必要となる。グッドプラクティスの科目でも、大学院生インストラクターへの支援として、彼らに対する事前の図書館ガイダンスの実施、彼らが理解・指導しやすい課題ワークシート作成の取り組みが行われた。

人類学の入門科目である「人類学3」(第3表：(8))では、クラス全体に図書館ガイダンスを実施する前に、少人数グループを指導する大学院生に対して図書館ガイダンスの予行が行われた。その目的は、大学院生が事前に図書館に関する知識を得て、学生に対する指導をしやすくするためであった(第4表・第5表：(8))。

化学の入門科目である「化学1A(一般化学)」(第3表：(12))では、大学院生が指導する実験のための課題ワークシートが作成された。そこでは、学生自身が立てた仮説に関連する情報資源を3件選び、それらをACSスタイル(American Chemical Society Style)で記した上で、その簡単な分析・評価をし、要約を記入することが求められた。このワークシート作成の目的の1つは、学生が課題をきちんと理解して取り組み、さらに大学院生インストラクターが彼らを指導しやすいよう、課題を明確化するためであった(第4表・第5表：(12))。

### 4. 協働的な実施体制

Mellon Initiativeは、教員1人につき、実施チームとして図書館を含む各部署の職員数人が協働する形がとられた。グッドプラクティスの科目においても、課題の設計、図書館ガイダンスの内容や実施時期、回数決定などにおける、教員と図書館員の協働が報告されている。

工学分野の研究スキル向上を目的とする科目である「工学E190R(技術コミュニケーション)」(第3表：(6))では、教員との協働による図書館ガイダンスが実施された。授業開始前の教員との

打ち合わせにおいて、図書館ガイダンスを授業のどこで行うのがふさわしいかが話し合われ、3回のガイダンス実施が決められた。そして、ガイダンスの目的の設定、課題のレベルに合わせたガイダンスのレベルと実施時期の決定も行われた。協働の結果、ガイダンスは、一般的な科学文献データベースから専門的な工学分野のデータベース、高度な検索テクニックの説明へと進む形がとられた(第4表・第5表：(6))。

ライティング能力の向上を目的とする科目である「カレッジ・ライティングR4B」(第3表：(10))では、「library research assignment」を課すにあたって、教員と図書館員が協働した。この科目では図書館を利用した調査が授業の中に組み込まれており、教員と図書館員は、課題の目的設定、タイミング、実施、フィードバックの全体を通して協働した。学生が課題を通して図書館目録やパスファインダーの利用を学ぶことができるよう、課題の設計が行われた。(第4表・第5表：(10))。

### 5. 図書館による取り組みの結果

グッドプラクティスの科目の報告文書では、図書館による取り組みを通してもたらされた結果についても述べられている(第6表)。

「library research assignment」を課した授業では、それを通して学生は研究プロセスの知識と研究スキルを向上させ、最終レポートなどに取り組むための準備をすることができた。リサーチ・ペーパーなどの課題と関連した図書館ガイダンスを実施した科目では、ガイダンスで説明された事柄をもとに、学生は適切な資料を検索して情報を収集し、リサーチ・ペーパーのトピックを深めることができるようになった。大学院生インストラクターに対する支援を実施した科目では、それを通して彼らは学生を指導するにあたって必要となる図書館利用や課題に関する知識を得ることができた。

第6表 図書館による取り組みの結果

	科目番号・科目名	図書館による取り組みの結果
(1)	フランス語 102 (フランス語のリーディング、 ライティングのスキル)	「library research assignment」を課すことによって、図書館ガイダンスにおける議論の共通トピックの確立、研究プロセスの最初の段階の手本を提示することができた。
(2)	造景学 154 (視覚記録から学ぶ)	オンラインガイドによって、学生は、研究プロジェクトの遂行と様々な情報源からの情報収集の方法を学んだ。
(3)	民族学 21AC (合衆国における人種・民族 グループの比較調査)	2回の図書館ガイダンスを実施したことで、学生がどの程度の進捗で研究に取り組んで、より特定の調査課題に的を絞るのを見ることが可能となった。1回のみ図書館ガイダンスを行っていた学期と比較して、ガイダンス後の学生の習熟度が高かった。
(4)	公衆衛生 150A (疫学と人間の疾病に関する 入門)	ほぼ全ての学生が、疾病ファクトシート作成の課題で必要とされたレビュー論文を、PubMedを利用して見つけることができた。
(5)	工学 190E (技術コミュニケーション)	1回目の図書館ガイダンスの後から2回目のガイダンスの間に、学生は文献レビューのトピックを狭めることができた。
(6)	工学 E190R (技術コミュニケーション)	適切な図書館ガイダンスの時期を決定し、それをシラバスに掲載した。
(7)	生物学 1A (一般生物学)	学生は、PubMed・Web of Science・Refworks に関して学んだ。
(8)	人類学 3	図書館ガイダンスの予行によって、大学院生インストラクターは、図書館利用スキルや課題に関連する彼らの役割に関して知識を深めた。
(9)	歴史学 8B (現代ラテンアメリカ)	図書館ガイダンスにおいて、学生はガイダンス後に課される「library research assignment」とリサーチ・ペーパー執筆のための準備をすることができた。ガイダンスを受講した後、彼らは、トピックを狭めること、適切な資料を見つけることができるようになった。
(10)	カレッジ・ライティング R4B	学生が「library research assignment」に取り組むプロセスは、彼らがリサーチ・ペーパーのトピックを深めるうえで有効であった。
(11)	平和構築・紛争予防研究 125AC	授業では2つのリサーチ・ペーパーが課題として課されたが、それに取り組んでいる際に、1回目は10%の学生、2回目は20%の学生が個別指導を受けた。
(12)	化学 1A (一般化学)	学生は、ワークシートに取り組むことで、情報を評価するスキルを発達させることができた。ワークシート作成は、大学院生に対する間接的な指導・援助にもなった。

注: Good Practices<sup>49)</sup>を参照して作成。

## C. プロジェクトの特徴と意義

### 1. 特徴

前節で述べたように、図書館は、課題の設計への関与、課題に関連する図書館ガイダンスの実施など、課題に関する取り組みに関わっていた。これらの課題や図書館ガイダンスは、計画的に授業を設計したうえで、適切な時期に実施されていた。そして、図書館によって、課題に取り組む学生に対して様々な形態での支援も行われた。大人数科目の授業では、学生を指導する大学院生インストラクターに対して、彼らの指導を支援する取

り組みも行われた。これらの取り組みは、教員と図書館員が協働して実施された。

Mellon Initiative による取り組みの特徴の1つは、授業に研究を導入する際に、授業のなかで課される課題が重視され、それに図書館が関わっていた点であった。特に、図書館資源を利用させる課題である「library research assignment」は、大きな位置を占めていた。最終レポートなどの準備として「library research assignment」を課した授業では、一連の課題を通して段階的な研究スキルの養成が目指されていた。

「library research assignment」の内容は、前節第1項でも述べたように、資料の検索、検索した資料の評価、正しい形式での引用、資料をもとにしたリサーチ・クエッション考案などであった。「library research assignment」を授業において課した理由は、学生自らによる知識の発見を促し、情報資源を活用して学生の知識とスキルを確立させるためであった。また、段階的に課題を課すことは、教員が参加した夏季研修会において推奨されたものであり、教員にとって取り入れやすい教育手法であったとされている。そして、このような課題を通して、学生は図書館資源を利用した調査を行う研究スキル、批判的思考能力などを向上させた<sup>54)</sup>。図書館は、授業における課題の設計、課題に取り組む学生への支援を通して、学生の研究スキル養成に関与した。

また、図書館によって、大学院生インストラクターに対する支援が実施された点も特徴であった。カリフォルニア大学バークレー校の大学院では、各研究科が大学教員養成のための教育や授業手法に関する科目を開講している。授業において学生指導を担当する大学院生インストラクターとして採用されるためには、この科目と大学院生インストラクター教育資源センターが提供するオンライン授業を履修する必要がある<sup>38), 42)</sup>。図書館による彼らに対する支援も、大学全体のこのような体制から生じたものである。

Mellon Initiative は、協働的な体制によって組織的に実施されたプロジェクトであった。プロジェクトには、選抜された様々な学科に所属する教員とともに、図書館を含む様々な部署の職員、評価や教授法の専門家が参加していた。2002年に策定された同校の戦略学術プランでは、学士課程教育の改善が提言されており<sup>36)</sup>、このようななかで Mellon Initiative は副学長室と図書館が中心的となって創設されたプロジェクトであった。さらに、大人数科目や低学年向け科目、コア科目を担当する教員を中心に選抜していたため、Mellon Initiative の対象となった授業を履修した学生が多かった点も特徴であった。

## 2. 意義

Mellon Initiative は、全学的な目標のもとで、様々な学科・部署からの参加者によって協働的かつ組織的に実施され、多くの学生を対象としたプロジェクトであった。2007年には、Mellon Initiative から派生した<sup>55)</sup>「Undergraduate Student Learning Initiative」<sup>56)</sup>が、学士課程教育担当の副学長室と、教育・研究に関する学内ガバナンスのための全学的教員組織である学術評議会 (Academic Senate) によって創設された。これは、全ての学士課程教育プログラムにおいて教育目標と評価手順を確立するために、学科を支援するものである。このように、全学的に学士課程教育を強化する方向が現れており、Mellon Initiative はその先駆けであった。

Mellon Initiative の提案者が副館長<sup>44)</sup>であったこともあり、図書館は当初から中心的な役割を果たしていた。プロジェクトのディレクターやマネージャー、学生の学習効果を調査するアセスメント・コンサルタントは、図書館員が担当していた。そして、プロジェクトに参加した学内の様々な図書館に所属する図書館員が、全ての参加教員に対して支援を行っていた<sup>54)</sup>。また、プロジェクトが開始された後、図書館では教育的役割に対して組織的な取り組みが行われるようになっていく。Mellon Initiative のディレクターも担当していた副館長の職務には、図書館全体における教育に関わる取り組みに関する業務も含まれるようになった<sup>50)</sup>。2008年には、学内の図書館員が参加する Educational Initiatives Council も組織されている。同組織は、副館長に対して、図書館の教育的役割に関係する方針やプログラム、資源についての助言を行っている<sup>45)</sup>。また、図書館は、授業において学士課程学生が取り組んだ研究成果を表彰する「Library Prize for Undergraduate Research」も同時期に創設しており<sup>50), 57)</sup>、授業における最終的な成果に対する関与も行っている。

図書館にとって、Mellon Initiative は自身の教育的役割を強化させることにつながったプロジェクトであった<sup>45), 50)</sup>。プロジェクトの各科目にお



いて、学生の研究スキル養成に関与し、プロジェクト全体でも、創設時から学士課程教育改善の取り組みにおいて中心的な役割を果たしていた。

以上より、Mellon Initiative は、成功を取めたプロジェクトであったと評価されていることが読み取れる。しかしながら、当事者によってその問題点も指摘されている。Mellon Initiative は、個々の教員に対する授業支援であり、学士課程教育のカリキュラム全体を改革するものではなかった<sup>58)</sup>。この点は、Mellon Initiative の限界であったといえるだろう。ただし、Mellon Initiative の延長として実施された、「Mellon-Undergraduate Student Learning Initiative Curricular Innovation Grants」<sup>41)</sup>は学士課程教育のカリキュラムの改革を目指したものであった。また、Mellon Initiative から派生した、上述の「Undergraduate Student Learning Initiative」は学科・プログラム単位での支援を行うものである。Mellon Initiative は、これらの試験的試みであったと位置づけられるだろう。Mellon Initiative において重視された「学士課程学生による研究」は、カリフォルニア大学バークレー校のような研究重視の傾向が強い大学において、学士課程教育を改善するためのきっかけになるものであった。

#### IV. 「学士課程学生による研究」における大学図書館の役割

##### A. アメリカの大学図書館における動向

第 III 章における、カリフォルニア大学バークレー校の事例調査の結果より、1) 同校では、学士課程教育の授業に研究を導入するための取り組みに、教員や他部署と協働する形で図書館が関わっていたこと、2) その取り組みにおいて、図書館資源を利用させる課題である「library research assignment」を通じた、研究スキルの養成が行われたことが明らかとなった。

このような取り組みは、カリフォルニア大学バークレー校だけで行われているわけではない。第 II 章 B 節でも述べたように、同校のような研究大学とはタイプが異なる、リベラルアーツ・カレッジや教育重視の大学においても、同様な事例

報告が行われている。しかし、その実態は、各大学によって様々である。第 III 章の調査結果から明らかにしたように、カリフォルニア大学バークレー校における学士課程教育の授業に研究を導入する取り組みは、組織的な体制を構築した上で行われたものであった。この点は、教育支援において、教員と図書館員の個人的なつながりから協働を広めていき、個別的な支援を行うという、小規模なリベラルアーツ・カレッジの場合<sup>59), 60)</sup>とは異なる。大規模大学では、その規模と複雑な組織構成ゆえに、リベラルアーツ・カレッジと同様のやり方はできないだろう。つまり、学士課程教育の改善という同じ目的に基づく取り組みであっても、大学のタイプや状況によって、その実現方法は様々であるといえる。

また、アメリカの大学図書館では、「library research assignment」に関する事例報告と議論の蓄積もなされている。「library research assignment」とは、図書館資源を利用した上で、求める情報の特定、情報の検索、検索した情報の評価、正しい形式での引用などを行うことが要求される課題である。課題の形態は、1) いわゆる通常のレポート課題、2) 論文などを要約した解題書誌レポートを作成する課題、3) 短答式や多肢選択式で情報の検索や評価などについての質問に回答する、ワークシートあるいはワークブック形式の課題の 3 タイプが主要なものである。図書館員が連携している授業において「library research assignment」を作成する場合、その形態は短めのレポート、ワークシートあるいはワークブックであることが多い<sup>61), 62)</sup>。

アメリカの大学では、授業において「library research assignment」を課すことは一般的に見られる。様々な大学図書館のウェブサイトにおいて、「library research assignment」についての教員向け説明資料や実例が公開されており、文献でも大学図書館によるウェブサイト公開の例が紹介されている<sup>63), 64)</sup>。

情報リテラシーの文脈では、このような「library research assignment」を授業に取り入れる目的は、学生の情報リテラシー能力を向上させるた

めとされている<sup>63), 65), 66)</sup>。たとえば、ACRLの情報リテラシー調整委員会 (Information Literacy Coordinating Committee) は、「高等教育のための情報リテラシー能力基準」<sup>14)</sup>を活用するための例の1つとして、「library research assignment」をあげている<sup>67)</sup>。

また、「library research assignment」を設計・実施する際には、教員と図書館員の協働が重要であるとされている<sup>63), 65), 66)</sup>。「library research assignment」において、協働が重要であるという考え方は新しいものではなく、以前から個々の教員と図書館員による協働の事例報告が存在している<sup>68)</sup>。さらに、教員を対象としたファカルティ・ディベロップメントの一環として、図書館による「library research assignment」をテーマとしたワークショップも開催されてきた<sup>68), 69)</sup>。

しかし、2000年代に入ると、本研究で明らかにしたように、学士課程教育の改善を目的とした全学的なプロジェクトなどにおいて、教員と図書館員が協働して「library research assignment」を設計・実施する取り組みが行われるようになった。このように、「library research assignment」における協働において、新たな展開が見られるようになってきている。

## B. 大学図書館の役割

### 1. 研究スキル・情報リテラシーの養成

本研究によって、高等教育改革の手段としての性格を持つ「学士課程学生による研究」を促進する際に、大学図書館は学生の研究スキル養成に関与していることが明らかとなった。これは、第I章で述べた、HealeyとJenkinsによる「学士課程学生による研究」の形態の類型<sup>12)</sup>(第1図)のうち、「研究方法や技術の習得」にあたる部分である。本研究は、多様な面を持つ「学士課程による研究」において、大学図書館がどの部分に関与しているのか、あるいは関与しようとしているのかについて、その一端を明らかにすることができた。

さらに、学生の研究スキル養成の際に、図書館資源を利用させる課題である「library research assignment」が重要な位置を占めていることも

分かった。先述したように、「library research assignment」は、図書館資源を利用した上で、求める情報の特定、情報の検索、検索した情報の評価、正しい形式での引用などを行うことが要求される課題である。これは、ACRLの「高等教育のための情報リテラシー能力基準」<sup>14)</sup>で述べられている事柄と同様なものである。事実、「library research assignment」の目的は、情報リテラシー能力の養成ともされている<sup>63), 65), 66)</sup>。

アメリカの大学図書館では、情報リテラシーと研究スキルが同一視されている、あるいは近いものと捉えられているという指摘がある<sup>25)</sup>。第II章でも述べたように、「高等教育のための情報リテラシー能力基準」<sup>14)</sup>では、「学士課程学生による研究」の促進に大きな影響を与えた『学士課程教育の再編』<sup>7)</sup>を引用し、そこで提唱された調査や問題解決、批判的思考を要する学習において、情報リテラシー能力が不可欠であるとしていた。「高等教育のための情報リテラシー能力基準」でも、情報リテラシーは研究スキルと同様なものを指し示していると考えられる。

本研究では、「学士課程学生による研究」の促進において、大学図書館が関与した取り組みを調査した。その結果より、「学士課程学生による研究」を促進する際に、大学図書館は学生の研究スキル養成に関与しており、その際の研究スキルとは情報リテラシーと同様なものであることが分かった。

### 2. 日本の大学図書館への示唆と今後の展開

1990年代以降、日本の大学でも学士課程教育改善の重要性が指摘されている。2008年の中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて(答申)』<sup>70)</sup>では、学士課程教育充実の手段として、授業時間外の「学修」を含めた45時間を1単位とする単位制度の実質化をあげている。2012年の『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)』<sup>71)</sup>でも、学修時間の実質的な増加・確保の必要性が指摘されており、それを実現するために、教育課程の体系化、組織的な教育の実施、授業計画(シラバス)の充実、全学的な

教学マネジメントの確立といった方策が提言されている。つまり、授業時間外における学生の学習を促進するような全学的な取り組みが必要となっている。

一方、大学図書館においても、学士課程教育への関与が注目されるようになってきている。たとえば、科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会による『大学図書館の整備について（審議のまとめ）：変革する大学にあって求められる大学図書館像』<sup>72)</sup>では、大学図書館に求められる機能・役割の1つとして、「教育活動への直接の関与」をあげている。

このような状況において、アメリカの大学における、学生自らによる研究や探究のための活動とそれを通じた学習である「学士課程学生による研究」を促進するための取り組みと、それに対する大学図書館の関与を検討することは、日本の大学と大学図書館において学士課程教育の改善を試みるにあたって重要な示唆を与えるといえる。たとえば、本研究の調査結果で示した、学士課程教育の授業に研究を導入するための取り組みへの大学図書館の関与、図書館資源を利用させる課題である「library research assignment」を通じた研究スキルの養成といった試みに関して、アメリカでの実践を参考にしつつ、日本の大学において導入を検討するのも良いであろう。

本研究は、高等教育改革の手段としての性格を持つ「学士課程学生による研究」と大学図書館の関係についての研究の端緒である。本研究で明らかにしたことを踏まえて、今後も引き続き研究を行いたい。

## 謝 辞

本研究は、平成24年度慶應義塾大学大学院博士課程学生研究支援プログラムの助成を受けたものです。電子メールでのインタビューにご協力いただいた、カリフォルニア大学バークレー校図書館のElizabeth Dupuis氏に厚く御礼申し上げます。査読者の皆様には、本稿を改善するにあたって多くの貴重なご意見をいただきました。御礼を申し上げます。執筆にあたってご指導いただいた

慶應義塾大学文学部の田村俊作教授に感謝いたします。

## 注・引用文献

- 1) Undergraduate researchには、定訳といえる日本語が現在のところ存在しない。「学士課程学生の研究体験」という訳も存在するが、本研究では「学士課程学生による研究」という言葉を利用する。
- 2) 中井俊樹. 学士課程の学生に研究体験は必要か：国際的動向と論点整理. 名古屋高等教育研究, 2011, no. 11, p. 171-190.
- 3) Jenkins, Alan; Healey, Mick. Undergraduate research and international initiatives to link teaching and research. CUR Quarterly, 2010, vol. 30, no. 3, p. 36-42.
- 4) Council on Undergraduate Research. <http://www.cur.org/>, (accessed 2013-10-19).
- 5) "Fact Sheet". Council on Undergraduate Research. [http://www.cur.org/about\\_cur/fact\\_sheet/](http://www.cur.org/about_cur/fact_sheet/), (accessed 2013-10-06).
- 6) Merkel, Carolyn Ash. "Undergraduate research at the research universities". Valuing and Supporting Undergraduate Research. Kinkead, Joyce, ed. Jossey-Bass, 2003, p. 39-53.
- 7) The Boyer Commission on Educating Undergraduates in the Research University. Reinventing Undergraduate Education: A Blueprint for America's Research Universities. 1998, 46p. [http://www.niu.edu/engagedlearning/research/pdfs/Boyer\\_Report.pdf](http://www.niu.edu/engagedlearning/research/pdfs/Boyer_Report.pdf), (accessed 2013-10-19).
- 8) Kinkead, Joyce, ed. Valuing and Supporting Undergraduate Research. Jossey-Bass, 2003, 98p.
- 9) Hu, Shouping; Scheuch, Kathyrine; Schwartz, Robert; Gayles, Joy Gaston; Li, Shaoqing. Reinventing Undergraduate Education: Engaging College Students in Research and Creative Activities. Jossey-Bass, 2008, 103p.
- 10) "About CUR". Council on Undergraduate Research. [http://www.cur.org/about\\_cur/](http://www.cur.org/about_cur/), (accessed 2013-10-19). 日本語訳は中井<sup>2)</sup>による。
- 11) Kinkead, Joyce. "Learning through inquiry: An overview of undergraduate research". Valuing and Supporting Undergraduate Research. Kinkead, Joyce, ed. Jossey-Bass, 2003, p. 5-17.
- 12) Healey, Mick; Jenkins, Alan. Developing Undergraduate Research and Inquiry. Higher Education Academy, 2009, 152p. [http://www.heacademy.ac.uk/assets/documents/resources/publications/developingundergraduate\\_final.pdf](http://www.heacademy.ac.uk/assets/documents/resources/publications/developingundergraduate_final.pdf).

- (accessed 2013-10-19). 日本語訳は中井<sup>2)</sup>による。
- 13) 中島(渡利) 夏子. 米国の研究大学における1990年代以降の学士課程カリキュラムの特徴：研究に基づく学習を重視するスタンフォード大学の事例から. 東北大学大学院教育学研究科研究年報. 2008, vol. 57, no. 1, p. 173-189.
  - 14) "Information Literacy Competency Standards for Higher Education". Association of College and Research Libraries. <http://www.ala.org/acrl/standards/informationliteracycompetency>, (accessed 2013-10-19). 同基準では、①必要な情報の特定、②情報へのアクセス、③情報の評価と内面化、④情報の効果的な利用、⑤情報を取り巻く問題への理解に関する基準が定められている。
  - 15) 新見慎子. アメリカの学部学生用図書館のサービスと概念の変遷：1990年代以降の変化を中心に. *Library and Information Science*. 2011, no. 66, p. 81-126.
  - 16) Daly, Emily. "Engaging undergraduates in research: Exploring student's research behavior and rewarding outstanding use of library resources". *Student Engagement and the Academic Library*. Snavelly, Loanne, ed. Libraries Unlimited, 2012, p. 51-61.
  - 17) Stamatoplos, Anthony. The role of academic libraries in mentored undergraduate research: A model of engagement in the academic community. *College & Research Libraries*. 2009, vol. 70, no. 3, p. 235-249.
  - 18) 新見慎子. アメリカの大学図書館による学士課程学生対象の表彰制度の現状調査. 三田図書館・情報学会研究大会発表論文集 2012年度. 2012, p. 29-32.
  - 19) Meyer, Richard W.; Walters, Tyler O. "Sowing an old field with a new crop: Collaborative services of libraries and other campus units". *Convergence and Collaboration of Campus Information Services*. Hernon, Peter; Powell, Ronald R., eds. Libraries Unlimited, 2008, p. 49-61.
  - 20) 学生エンゲージメント (student engagement) は、高等教育におけるアセスメント研究で用いられる言葉である。"大学が提供する教育的な場や機会が学生の学習や個人的な成長を促す、という考え方のもとで進められる学生アセスメントや教育実践の技術・デザイン開発の総称"であり、アメリカで実施されている学生調査である National Survey of Student Engagement にともなって用いられ始めたといわれている。溝上慎一. "授業・授業外における学習タイプと能力や知識の変化・大学教育満足度との関連性：単位制度の実質化を見据えて". *大学教育を科学する：学生の教育評価の国際比較*. 山田礼子編著. 東信堂, 2009, p. 119-133.
  - 21) "Introduction". *Student Engagement and the Academic Library*. Snavelly, Loanne, ed. Libraries Unlimited, 2012, p. ix-xiv.
  - 22) Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research. <http://www.lib.berkeley.edu/mellon/index.html>, (accessed 2013-10-19).
  - 23) Cornell Undergraduate Information Competency Initiative. <http://infocomp.library.cornell.edu/>, (accessed 2013-10-19).
  - 24) "UNLV Faculty Institute on Research-Based Learning for High Impact Classes". University Libraries at the University of Nevada, Las Vegas. <http://www.library.unlv.edu/faculty/institute/2010/index.html>, (accessed 2013-10-06).
  - 25) 大城善盛. アメリカの大学図書館界における情報リテラシーの研究：理論と実践の歴史的分析を通して. *花園大学文学部研究紀要*. 2010, no. 42, p. 26-53.
  - 26) Fister, Barbara. Fostering information literacy through faculty development. *Library Issues*. 2009, vol. 29, no. 4.
  - 27) Callison, Rachel; Budny, Dan; Thomas, Kate. "Library research project for first-year engineering students: Results from collaboration by teaching and library faculty". *Relationships between Teaching Faculty and Teaching Librarians*. Kraat, Susan B., ed. Haworth Information Press, 2005, p. 93-106.
  - 28) Winch, Elsa E.; Hunter, Shonah A. "Integrating information literacy into the first-year biology course: The poster project". *Information Literacy Collaborations That Work*. Jacobson, Trudi E.; Mackey, Thomas P., eds. Neal-Schuman Publishers, 2007, p. 147-160.
  - 29) Stevens, Christy R.; Campbell, Patricia J. "The politics of information literacy: Integrating information literacy into the political science curriculum". *Information Literacy Collaborations That Work*. Jacobson, Trudi E.; Mackey, Thomas P., eds. Neal-Schuman Publishers, 2007, p. 123-145.
  - 30) Polkinghorne, Sarah; Wilton, Shauna. Research is a verb: Exploring a new information literacy-embedded undergraduate research methods course. *Canadian Journal of Information and Library Science*. 2010, vol. 34, no. 4, p. 457-473.
  - 31) "Articles". Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research. <http://www.lib.berkeley.edu/mellon/publicity/articles.html>, (accessed 2013-10-19).
  - 32) The University of California Statistical Summary of Students and Staff Fall 2012. [— 70 —](http://legacy-</a></li></ol></div><div data-bbox=)

- its.ucop.edu/uwnews/stat/statsum/fall2012/statsum2012.pdf. (accessed 2013-10-13).
- 33) The Carnegie Classification of Institutions of Higher Education. <http://classifications.carnegiefoundation.org/>, (accessed 2013-10-19).
  - 34) "Description of the UC Berkeley Libraries". The Library-University of California, Berkeley. <http://www.lib.berkeley.edu/AboutLibrary/description.html>, (accessed 2013-10-19).
  - 35) University of California. "University of California full-time equivalents SMG & MSP, academic and PSS personnel October 2012". [http://legacy-its.ucop.edu/uwnews/stat/headcount\\_fte/oct2012/er1bkf.pdf](http://legacy-its.ucop.edu/uwnews/stat/headcount_fte/oct2012/er1bkf.pdf), (accessed 2013-10-19).
  - 36) 山田礼子. "アメリカの高等教育機関における IR 部門の役割と事例". 大学教育を科学する: 学生の教育評価の国際比較. 山田礼子編著. 東信堂, 2009, p. 137-156.
  - 37) カリフォルニア大学バークレー校では, ティーチング・アシスタント (TA) ではなく, 大学院生インストラクター (Graduate Student Instructor) という名称が使用されている。
  - 38) 宇田川拓雄. カリフォルニア州立大学バークレー校における TA システム. 高等教育ジャーナル. 2006, no. 14, p. 129-141.
  - 39) 小笠原正明. 教育の組織化とカリフォルニア大学バークレー校の教育研修. RIHE. 2007, no. 91, p. 11-17.
  - 40) 金井裕美子. "カリフォルニア大学バークレー校における共通教育および教育プログラム評価". 平成 21 年度大学教育推進プログラム「新世代到達目標型教育プログラムの構築」. <http://home.hiroshima-u.ac.jp/hipro/kaigaityousa.pdf>, (accessed 2013-10-19).
  - 41) Mellon-USLI Curricular Innovation Grants. [http://vpapf.chance.berkeley.edu/Mellon\\_USLI\\_Grants.pdf](http://vpapf.chance.berkeley.edu/Mellon_USLI_Grants.pdf), (accessed 2013-10-06).
  - 42) Dupuis, Elizabeth A. Amplifying the educational role of librarians. *Research Library Issues*. 2009, no. 265, p. 9-14.
  - 43) Patricia Iannuzzi 氏は, 2013 年現在, ネバダ大学ラスベガス校図書館の図書館長である。Iannuzzi 氏は, ネバダ大学ラスベガス校の「Faculty Institute on Research-Based Learning for High Impact Classes」<sup>24)</sup>においても中心的な役割を果たしていた。
  - 44) カリフォルニア大学バークレー校図書館の副館長 Elizabeth Dupuis 氏への電子メールによるインタビュー (2013-08-27 回答)。Dupuis 氏には, 「プロジェクト創設の経緯」と「グッドプラクティスの報告書に関する詳細」について回答していただいた。
  - 45) Models of Academic Support Library/Faculty Fellows for Undergraduate Research University of California, Berkeley: 2007 Interim Report (2004-2007 Summary). [http://www.lib.berkeley.edu/mellon/overview/2004-2007\\_Report.pdf](http://www.lib.berkeley.edu/mellon/overview/2004-2007_Report.pdf), (accessed 2013-10-19).
  - 46) Maughan, Patricia Davitt. "The winds of change: Generation Y, student learning, and assessment in higher education". *Student Engagement and Information Literacy*. Gibson, Craig ed. Association of College and Research Libraries, 2006, p. 68-103.
  - 47) "About the Courses". Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research. <http://www.lib.berkeley.edu/mellon/courses/coursesintro.html>, (accessed 2013-10-19).
  - 48) "Course List". Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research. <http://www.lib.berkeley.edu/mellon/courses/courses.html>, (accessed 2013-10-19).
  - 49) "Good Practices". Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research. <http://www.lib.berkeley.edu/mellon/evaluation/goodpractices.html>, (accessed 2013-10-19).
  - 50) Dupuis, Elizabeth A.; Maslach, Christina; Schrager, Cynthia D.; McDaniel, Sarah. "Information literacy and undergraduate research: Meeting the challenge at a large research university". *Information Literacy Collaborations That Work*. Jacobson, Trudi E.; Mackey, Thomas P., eds. Neal-Schuman Publishers, 2007, p. 5-18.
  - 51) Gallagher, Kathleen. "From guest lecturer to assignment consultant: Exploring a new role for the teaching librarian". *Uncharted Waters: Tapping the Depths of our Community to Enhance learning*. Sietz, Brad; deVries, Susann; Fabian, Sarah; Stevens, Robert Anthony; Uyeki, E. Chisato; Wallace, Amy, eds. LOEX Press, 2009, p. 39-43.
  - 52) Library research assignment は日本では一般的ではないため, 現在のところふさわしい訳語が日本語には存在しない。そのため, 本研究では, 便宜的に「library research assignment」という言葉をそのまま使用している。
  - 53) 以下のグッドプラクティスの科目に関しては, 報告文書に「library research assignment」の実物が掲載されている。「フランス語 102」(第 3 表～第 5 表: (1)), 「歴史学 8B」(第 3 表～第 5 表: (9)), 「カレッジ・ライティング R4B」(第 3 表～第 5 表: (10)), 「化学 1A」(第 3 表～第 5 表: (12))。
  - 54) Evaluation Summary: Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research. <http://>

- www.lib.berkeley.edu/mellon/overview/2008\_EvaluationReport\_Mellon\_Final.pdf, (accessed 2013-10-19).
- 55) “About the Project”. Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research. <http://www.lib.berkeley.edu/mellon/overview/projectintro.html>, (accessed 2013-10-19).
- 56) “Undergraduate Student Learning Initiative”. Vice Provost for Teaching, Learning, Academic Planning & Facilities, University of California, Berkeley. <http://vpapf.chance.berkeley.edu/usli.htm>, (accessed 2013-03-18). 2013年10月19日現在、このサイトにはアクセスできないが、Internet Archive Wayback Machine より2013年4月24日時点のサイトを閲覧できる。<http://web.archive.org/web/20130424073150/http://vpapf.chance.berkeley.edu/usli.htm>, (accessed 2013-10-19).
- 57) “Library Prize for Undergraduate Research”. The Library-University of California, Berkeley. <http://www.lib.berkeley.edu/researchprize/recognition.html>, (accessed 2013-10-19).
- 58) Models of Academic Support Library/Faculty Fellows for Undergraduate Research: A Request for Extension to the Andrew W. Mellon Foundation from the University of California, Berkeley December 7, 2007. [http://www.lib.berkeley.edu/mellon/overview/2007\\_Grant\\_Proposal\\_Extension.pdf](http://www.lib.berkeley.edu/mellon/overview/2007_Grant_Proposal_Extension.pdf), (accessed 2013-10-19).
- 59) 長澤多代. 大学教育における教員と図書館員の連携を促す図書館員によるつながり方の開拓：アラム・カレッジのケース・スタディをもとに. 日本図書館情報学会誌. 2012, vol. 58, no. 1, p. 18-34.
- 60) 長澤多代. 大学教育における教員と図書館員の連携を促すカスタマイズ型の学習支援：アラム・カレッジのケース・スタディをもとに. 日本図書館情報学会誌. 2012, vol. 58, no. 4, p. 185-201.
- 61) Parker-Gibson, Necia. Library assignments: Challenges that students face, and how to help. *College Teaching*. 2001, vol. 49, no. 2, p. 65-70.
- 62) 第III章で取り上げた Mellon Initiative の科目でも、ワークシート形式の「library research assignment」が課されていた。グッドプラクティスの報告文書に掲載された4科目における「library research assignment」<sup>53)</sup>のうち、以下の3科目がワークシート形式のものであった。「フランス語102」(第3表～第5表: (1))、「カレッジ・ライティングR4B」(第3表～第5表: (10))、「化学1A」(第3表～第5表: (12))。
- 63) Rockman, Ilene F. “Conclusion: Continuing the dialogue”. *Integrating Information Literacy into the Higher Education Curriculum: Practical Models for Transformation*. Rockman, Ilene, ed. Jossey-Bass, 2004, p. 237-250.
- 64) 上記文献<sup>63)</sup>で紹介されている以外にも、多くの大学図書館で「library research assignment」の教員向け説明資料や実例がウェブサイトで公開されている。たとえば、カリフォルニア大学バークレー校図書館のウェブサイトでは、「Effective Research Assignments」というページにおいて、「library research assignment」についての教員向け説明が掲載されている。“Effective Research Assignments”. The Library-University of California, Berkeley. <http://www.lib.berkeley.edu/instruct/assignments.html>, (accessed 2013-10-19).
- 65) Ellison, Alicia B. Positive faculty/librarian relationships for productive library assignments. *Community & Junior College Libraries*. 2004, vol. 12, no. 2, p. 23-28.
- 66) McAdoo, Monty L. Building Bridges: Connecting Faculty, Students, and the College Library. American Library Association, 2010, 159p.
- 67) Information Literacy Coordinating Committee. “Using Standards-Develop Assignments”. Association of College and Research Libraries. <http://www.ala.org/acrl/issues/infolit/standards/using/assignments>, (accessed 2013-10-19).
- 68) Mosley, Pixey Anne. Creating a library assignment workshop for university faculty. *Journal of Academic Librarianship*. 1998, vol. 24, no. 1, p. 33-41.
- 69) Werrell, Emily L.; Wesley, Theasa L. Promoting information literacy through a faculty workshop. *Research Strategies*. 1990, vol. 8, no. 4, p. 172-180.
- 70) 中央教育審議会. “学士課程教育の構築に向けて(答申)”. 文部科学省. 2008. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm), (accessed 2013-10-19).
- 71) 中央教育審議会. “新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて: 生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)”. 文部科学省. 2012. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm), (accessed 2013-09-21).
- 72) 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会. “大学図書館の整備について(審議のまとめ): 変革する大学にあって求められる大学図書館像”. 文部科学省. 2010. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm), (accessed 2013-10-19).

## 要 旨

**【目的】** 学士課程教育において、学生自身が取り組む研究や探究のための活動である「学士課程学生による研究」が国際的に注目されるようになってきている。本研究の目的は、「学士課程学生による研究」における大学図書館の役割を検討することである。

**【方法】** カリフォルニア大学バークレー校のプロジェクトを対象として、事例調査を行った。同校は、学士課程教育の授業に研究を導入するためのプロジェクトであった、「Mellon Library/Faculty Fellowship for Undergraduate Research」を通して、授業改善の取り組みを行っていた。本研究では、ウェブサイトで公開されている文書を主に利用して、プロジェクトの詳細を調査した。特に、図書館の取り組みがグッドプラクティスとされた12科目に着目して、授業に「学士課程学生による研究」を導入するために実施された大学図書館の取り組みの特徴を明らかにした。

**【結果】** カリフォルニア大学バークレー校のプロジェクトでは、学生の研究スキル向上を目的として、図書館資源を利用する課題を授業に導入することが重視された。分析対象とした科目の大部分において、図書館員は授業における課題に対する取り組みに関わっていた。教員と図書館員は協働して、図書館資源を利用する課題の設計、課題関連の図書館ガイダンスを実施した。課題に取り組んでいる学生に対しても、図書館員は様々な形態での支援を実施した。さらに、少人数グループのディスカッションや実験を担当する大学院生インストラクターに対して、彼らの指導を支援する取り組みも行われた。これらの取り組みを通して、図書館は自身の教育的役割を強化させ、学内の教育改革において中心的な役割を果たした。本研究の結果より、高等教育改革の手段としての性格を持つ「学士課程学生による研究」を促進する際に、大学図書館は、学生の研究スキル・情報リテラシー養成の面で重要な役割を果たすことができると結論付けられる。

学士課程学生による研究の促進における大学図書館の役割：カリフォルニア大学バークレー校の事例調査

付録 Mellon Initiative の科目一覧

	科目番号	科目名
1	アフリカ系アメリカ人研究 5	アフリカ系アメリカ人の生活と文化
2	農業資源経済学 16AC	環境資源経済学の上級トピック
3	人類学 2 <sup>1</sup>	考古学入門
4	建築学	アメリカ文化としてのアメリカ建築
5	美術 23AC   女性研究 23AC	アメリカのサイバーカルチャーの基盤
6	アジア系アメリカ人研究 20A	合衆国におけるアジア人の歴史に関する入門
7	生物学 1A	一般生物学
8	化学 1A	一般化学
9	カレッジ・ライティング R1B <sup>2</sup>	リーディング, 創作, 調査
10	地球惑星科学 8	過去の気候
11	教育学 40AC	体験教育: 学校内外の多様性と平等・不平等
12	教育学 75	スポーツと高等教育に関する入門
13	教育学 198	教育学研究分析に関する入門
14	[工学] 学際研究 110	コンピュータ入門
15	工学 190 <sup>3</sup>	技術コミュニケーション
16	工学 190E	技術コミュニケーション
17	環境科学 10	環境科学入門
18	疫学 150A <sup>4</sup>	疫学入門
19	民族学 10B	人種と民族の理論
20	民族学 10B AC	人種と民族の理論
21	民族学 21AC	合衆国における人種・民族グループの比較調査
22	フランス語 102	フランス語のリーディングとライティングのスキル
23	地理学 10	世界の地域, 人々, 国家
24	ドイツ語 55   スラブ語 55	昨日の世界: 1900年頃のウィーンとハプスブルク帝国
25	歴史学 8B	現代ラテンアメリカ
26	歴史学 100AC	アメリカ生活における奴隷制度
27	歴史学 139AC   アメリカ文化 101AC	合衆国史における市民権運動と社会運動
28	美術史 168	イギリスのルネッサンス: 文化と視感
29	国際アジア研究 45	世界史の調査
30	造景学 154	視覚記録から学ぶ: 環境デザイン・アーカイブにおける一次史料
31	法学研究	法律と社会に関する入門
32	法学研究 AC	人種, 文化, 法律
33	言語学 155 AC	ネイティブアメリカンがヨーロッパ人と出会う
34	材料科学と工学 130A	実験材料科学
35	中近東研究 18	古代エジプト入門
36	栄養学 10	人間の栄養に関する入門
37	平和構築・紛争予防研究 125AC	戦争, 文化, 社会
38	政治学 1AC	アメリカ政治入門
39	政治学 118AC	3つのアメリカ文化
40	政治学 120AC	国際関係入門
41	公衆衛生 150E	健康と社会的行動に関する入門
42	社会学 3AC	社会学の基本
43	東南アジア研究 10B	東南アジアの島の人々と文化
44	統計学 21	ビジネスのための蓋然性と統計学に関する入門

注: Course List<sup>48)</sup>を参照して作成。

<sup>1</sup> グッドプラクティスの報告文書では、「人類学 3」に関する報告が行われている。

<sup>2</sup> グッドプラクティスの報告文書では、「カレッジ・ライティング R1B」のうちの1クラス「カレッジ・ライティング R4B」に関して扱っている。

<sup>3</sup> グッドプラクティスの報告書では、「工学 E190R (技術コミュニケーション)」と表記されている。

<sup>4</sup> グッドプラクティスの報告文書では、「公衆衛生 150A (疫学と人間の疾病に関する入門)」と表記されている。